

第1問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

チエーザレ・パヴェーゼの日記には「何月何日のところに……ということを追加」あるいは「何月何日に書いたことからは……という結論になる」といった記述がしばしば登場してくる。しかも追加される内容は、当日は記さずにあとになって思い出した出来事ではなく、きわめて抽象的な思念である。ただひたすら自分の日記に読みふけっている作者の孤独な姿がありありと浮かんでくるようだ。日記（いちいち断るのはわずらわしいので、ただ日記とだけしておくけれども、*Journal intime* 正しくは個人がその内面を書き記した日記）をつけること自体、あるいはそれを公刊さえすることを、近代精神の《病》と呼んだポール・ブルジュであれば、病はここで極頂にまで達したと評したかもしれない。だが、いかに病気と呼ばれようとも、ある種の人びとにとって、日記はただ毎日つけるだけでは十分ではない。それを繰り返し読み、かつ意見を追加してゆかなければいけないのだ。再読と記述の追加とは、日記を書くという行為の何か本質的な部分につながっている。

というのも、ここでは日記を一つの保存装置、とりわけ《自己》を保存する容器と考えたいのだが、何であれ、また何のためであれ、保存するということは、その保存したものを将来いつか取り出してくるのを前提としているはずだからである。今日つくったジャムをいつかは食べるなどはまったく考えもしないで、瓶に密封するひとがいるだろうか。もつとも、時がたつにつれて、保存したことそのものを忘れてしまう場合はあるけれども――われわれの多くの日記のつけ方はこれにあてはまるだろう。しかしパヴェーゼは、けつして忘れることなく、ときどき瓶のふたを開いてはジャムを少しずつなめるような具合に、自分の日記を読みかえし、そのうえ新たな味つけまでしているのだ。つまり、保存という作業の基本を忠実に守っているわけである。

だがそれにしても、保存するものがジャムであるのと自己であるのとでは、保存の姿勢がずいぶんと変わってくる。ジャムの保存は、密封した瓶をあけて内容を消費しつくした時点でその目的は達成され完結する。他方で日記の再読にあつては、保存の対象はある種のかたちで消費されるとはいえず、しかし減少することはけつしてなく、逆に、記述の追加を通してたえず自己増殖をつづけてゆくだろう。このちがいは小さくない。保存したものが自己増殖するという点で、日記を書くことは、むしろ蓄財やあるいは切手、昆虫などの収集に似ているかもしれない。日記に記された内面と同様に、資本もまた自己増殖をつづける――少なくとも最初からそれが消滅することは願われていないのであり、しかもそのことを確認するために、資本家はたえず帳簿に目を通さなくてはならない。切手の収集家もまた、日毎ふえてゆく収集品を前にしてほくそえみ、逆に、せつかく集めたものがたつた一つでもなくなればひどく嘆き悲しむであらう。

古代以来の日記文学の伝統のあるわが国は措くとして、ヨーロッパにおいては、日記の発達は商人のつける会計簿に一つの起源があるようだ。言いかえれば、自己の内面を日記に綴るということは、自己を一種の財と見なして蓄積することであり、それは一方で資本主義、他方で個人主義という、ともに近代ヨーロッパのコン・カン⁽⁷⁾をなすとも言うべき考え方の成長をまつてはじめて現実のものとなった。収集がただの趣味以上のものとして広く行われるようになるのも、おそらくはブルジョワ社会においてのことであつて、ここでも同じ原理が作動しているはずである。ただし、財の蓄積、保存とは言つても、収集や蓄財の場合に対象となるのはいつでも他の財と交換が可能な財であり（たとえ

ば貯めたお金で家を(1)コウニユウする)、したがってこの保存はまだ目的のための手段という性格を多少とも残しているのにたいして、日記に記される自己の他のものに変わりうる余地はほとんどない。それゆえにこそ、日記においては手段の自己目的化が蓄財や収集にもましていつそう激しく進行するのだが。

資本家の帳簿とほとんど等価な自己の記録、つまり何ごとかのための手段として記される日記は、しかし、たしかに存在している。いやそうした日記のほうがむしろ多数であるのかもしれない。明日のより多くの収入を念しながら今夜のうちに会計簿の記帳を怠らない商人と同じ姿勢で、よりよい自己の実現、向上をめざして、とりわけ反省に多くの部分をさいて綴られる日記である。「菓子を食べすぎたり、菓子は之より断然廃すべし」と明治三〇年に記したのは西田幾多郎であるが、殖産興業の理念が支配するこの時代に即応して発行された博文館の常用日記のなかに同様の反省を書きつけたひとは、西田以外にも少なくはなかっただろう。ここでは明らかに、自己の内面を記録することは、克己、向上という目的に従属した手段にとどまっている。これにくらべらるならば、先のパヴェーゼの日記、また「日記は私の社交界、私の仲間」であると記すアミエルの日記は、外部への道を閉ざされ、自己の向上をめざすかわりに、ひたすら自己への沈潜・耽溺に終始している点で対照的な性格の日記である。

おそらくは、堅実な(つまり一定の目標をもった)資本家がやがて金をためることだけが目的の守銭奴に(2)ダシ、また博物学的興味から何かの収集をはじめたはずの収集家がいつのまにか集めることそれ自体に情熱を傾けるにいたると同じ過程でもって、向上のための自己の記録が、自己というものに執着し沈潜する日記に転じたのだ。この自己目的化あるいは自己疎外は、やはり逸脱、トクサク(3)として結局のところ病としか呼びえないものだろうか。そうではあるにせよ、しかし注目しなければならないのは、こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっているという点である。たとえば美術館、博物館または古文書館など、その制度化と公開が近代以前の社会では考えられなかったの⁽⁴⁾を思い出すならば、われわれの社会においては、個人のレヴェルで収集癖や日記の習慣が定着するとともに、全体としても、単純な消費の対象とはならない知識や財を記録し保存し、要するに永遠化することに多大のエネルギーが投じられているのがわかる。自己の記録に拘泥する日記の向こう側に透けて見えてくるのは、近代以降の社会に生きるわれわれに宿命的なフエティシズムにほかならない。

日記が保存する対象は、瓶詰のジャムとは、またお金や収集品とさえ異なる、きわめて特殊な財であり、それゆえに日記は、あらゆる保存装置のうちでもっとも完全なあるいは忠実な、ということとも不幸な装置になつてしまった。こうした出口のない迷路のような日記は、しかし、保存という行為の本質を何にもまして純粹に守り、いかなる現実の目的にも拘束されないだけに、逆にある種の自由ないし解放を作者にもたらしもするとは言えないだろうか。日記の機能を極度に追求した日記は、自己にとつて牢獄であるとともに、想像力がはばたきはじめる場所でもあるのだ。自己目的化ということでは共通している蓄財や収集癖も、イゼンとして事物とのつながりを残している点で、日記の純粹さには及ばない。同じく毎日綴られながらも、備忘録や反省の記録にあつては、記憶は個々の現実のなかで消費し尽くされて姿を消してしまう。これにたいして、たえず自己にまつわる記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、存在の感覚を確認すること——これこそが、パヴェーゼのような日記作家の、自分の日記を再読し新たな記述を追加するさいの、

D 一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何ものにも換えがたい楽しみであったにちがいない。

(注) 1 チェーザレ・パヴェーゼーイタリアの詩人(一九〇八〜一九五〇)。

2 Journal intimeーフランス語。ここでは「内面の日記」の意味。

3 ポール・ブルジェーフランスの作家、批評家(一八五二〜一九三五)。

4 ブルジョワーここでは近代ヨーロッパの有産者。

5 西田幾多郎ー哲学者(一八七〇〜一九四五)。

6 博文館の常用日記ー出版社の博文館が明治期から発売している日記帳。

7 アミエルースイスの哲学者、文学者(一八二一〜一八八一)。

8 フェティシズムー特定の事物を極端に愛する性向。

問1 傍線部(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

5

1

(ア)

1 コンカン

- ① 箱根のセキを越える
- ② 太いミキを切る
- ③ キモに銘ずる
- ④ 入会をススめる
- ⑤ 水がクダを通る

(イ)

2 コウニユウ

- ① コウキ肅正を徹底する
- ② コウセツを問わない
- ③ 山がコウヨウする
- ④ 新聞をコウドクする
- ⑤ 日本カイコウを調べる

(ウ)

3 ダ

- ① ダミンをむさぼる
- ② 努力はムダにならない
- ③ 川がダコウする
- ④ ダラクした空気
- ⑤ ダケツ案を提示する

(エ)

4 トクサク

- ① 夢と現実がコウサクする
- ② 陰でカクサクする
- ③ 文章をテンサクする
- ④ 辞書のサクイン
- ⑤ 空気をアツサクする

- (オ)
- 5 イゼン
- ① イリヨクを發揮する
- ② アンイな考え
- ③ 現状をイジする
- ④ 法律にイキヨする
- ⑤ 事のケイイを説明する

問2

傍線部A「保存という作業の基本を忠実に守っている」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は6。

- ① 保存において重要なのは、現状をそのまま残すことだが、日記を後世に残すために種々の工夫をこらすパヴェーゼの行為は、現在のあるがままの事実を忠実に将来に伝えようとする営みであるということ。
- ② 保存物が腐らないような密閉性の高さこそが保存の要点であるが、日記を一人の読者として点検するパヴェーゼの行為には、自己の内面を純粹に密封しようとする姿勢が見られるということ。
- ③ 保存のためには、人工的に手を加えることが必要であるが、その日の日記を記すだけではなく、後から日記に記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存に必要な加工にあたるということ。
- ④ 保存するのは保存物を何らかの形で用いるためであるが、自分で自分の日記を読み、場合によっては記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存物の使用という点で保存の目的にかなっているということ。
- ⑤ 財産の保存は、その財が自己増殖していく点に特徴があるが、その日の日記を書くだけでなく、後から記述を追加していくパヴェーゼの行為は、自己をしないで増殖させていくような行為になっているということ。

問3

傍線部B「ここでも同じ原理が作動している」とあるが、何について、どのような「原理」が「作動」していると考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は7。

- ① 近代ヨーロッパにおいては蓄財の精神が働いているのと同じように、ブルジョワ社会においても、財の蓄積を尊ぶ資本主義の原理が働いているということ。
- ② 自己の内面を日記に綴る営みの背景に資本主義と個人主義の成長という原理が見られるように、趣味の域を超えた収集活動の広がりにもそのような背景があるということ。
- ③ 収集はただの趣味以上のものであるが、収集活動と趣味活動の双方に、ブルジョワ社会を支える資本主義と個人主義の原理が働いているということ。

- ④ 資本主義と個人主義という二つの原理が近代ヨーロッパの基本的な精神を形成したように、その二つの原理が同じようにブルジョワ社会を形成したということ。
- ⑤ 日記の発達の起源に財の蓄積という商業活動の原理があったように、収集活動が趣味以上のものとなっていくのも商業活動のためであるということ。

問 4

傍線部C「こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8**。

- ① 日記が、自己の向上のための記録から、自己目的化した日記へと転じたことと、近代社会において美術館や博物館など事物の収集それ自体に多大なエネルギーを傾ける設備が成立したことは、同じ精神にもとづいているということ。
- ② 近代社会において、個人のレヴエルでの収集や自己の記録である日記が定着し、趣味以上のものとして普及したのと同様に、美術館や博物館・古文書館が制度化され、収集されたものが広く一般に公開されるようになったということ。
- ③ 一定の目標を定めて金銭を蓄積していた資本家が、金を貯めることだけが目的の守銭奴と化したように、日記を書くことで日々の反省をしていた日記の書き手も、自己の向上それ自体に深くこだわるようになったということ。
- ④ 近代の資本主義社会で、個人が消費の対象にならない知識や財を記録・蓄積し、保存するようになったのは、美術館や博物館・古文書館の制度化や整備による影響から生じたことで、両者には共通の価値観が見られるということ。
- ⑤ 自己の記録に拘泥する日記が、個人主義に根ざした病を反映する一方で自己の蓄積と再生を目的とするように、近代以前の社会では考えられなかった美術館や博物館などの公開も、知識の保存と更新を目指しているということ。

問 5

傍線部D「一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何ものにも換えがたい楽しみであったにちがいない」とあるが、ここからうかがわれる筆者の日記に対する考え方に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9**。

- ① 保存という行為の本質を純粋に追求した日記は、出口のない迷路であるとともに、再読や新たな記述の追加によって想像力が解放される場所でもある。
- ② 日記を記述することは、逆に記憶を希薄にするという作用を持つが、日記を読むことを通して、記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、存在感を味わうことができる。
- ③ 日記の機能を極度に追求したために、外部への道を閉ざされたような日記は、自己への沈潜・耽溺に終始する一方で、自己を完全に保存してくれるものとなる。
- ④ 日記は、蓄財や収集の場合と違い、保存した自己を他のものと交換することはできないが、それだけに自己を不変のものとして保存するという楽しみがある。

⑤ 個人が内面を書き記した日記は、自己目的化や自己疎外を通して近代精神の病をもたらすが、一方において、知識や財を記録し、永遠化する楽しみがある。

問6 本文における筆者の主張に合致するものを、次の①～⑤のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

11

10

① 日記という保存装置に保存された自己も、消費されうる点で、瓶に保存されたジャムと同じだが、その消費のあり方はジャムと大きく違っている。日記に保存された自己の場合、収集された切手や昆虫と同じく、消費されることが最初から期待されていない。

② 日記を書くという行為の本質的な部分にあるのは、日記を書く人物の孤独であるため、自己を増殖させたいという願望が生まれる。その自己増殖の結果、日記を書く行為は近代社会を生きる人間の孤独をいやし、孤独の迷路からの解放をもたらす。

③ 日記に記述を追加するパヴェーゼの行為は、完成しない自己の像を完成させようとする果てしない試みである。その自己の像への執着は近代精神の病の徴候であるが、そこには過去を再構成するばかりでなく、想像力の領域でも存在の感覚を確認しようとする志向が潜んでいる。

④ 日記の書き手は世界にただ一人の個人であるという条件があるため、日記の中の自己は貨幣や収集品と違って、いくら自己増殖しても他のものと交換できない。個人のそのかけがえのなさゆえに、日記においては、自己の反省や克己心・向上心が記され、よりよい自己の実現に向けて努力が語られる。

⑤ 反省の記録としての日記は自己の向上という功利的な目的がある点で、商人のつける会計簿と類似する。しかし、世俗的な向上を目指す自己中心的な功利性ゆえに、社会的、道徳的に外部への道が閉ざされることになり、自己に沈潜する自己目的化した日記へと転じることもなる。

⑥ 書くこと自体が目的化した日記は、たとえば具体的に自己の出来事が書かれていなくても、自己増殖的な性格が強く、近代以降の美術館や博物館などと共通の構造を備えている。ただし、日記の場合、保存の対象が抽象的な自己の思念になる分だけ、自己目的化が純粹になる傾向がある。

第2問

次の文章は、津島佑子の小説「水辺」の末尾である。「私」は夫と別居し、娘との二人暮らしの日々がしばらく続いた。二人の住まいは四階建ての一番上の部屋で、その部屋の中を通らないと屋上に出られない構造になっている。ある夜、「私」は壁の向こうに水の音が聞こえるように思ったが、そのまま寝入ってしまった。翌朝、階下の人から水漏れがするという苦情が持ち込まれる。本文はそれに続く部分である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

— すみません、そこは遠慮して下さいませんか。それより、屋上を見てみましょう。けき、屋上は調べなかつたんです。

私はあわてて、二人の男を部屋のなかの階段に導いた。敷き放しの乱れた蒲団など見られたら、と思うだけで、体がこわばった。

風呂場は異常なかつた。屋上に出るドアを開け、私が真先に外へ出た。眼に異様なものが映った。私は、思わず、声を洩らした。乾ききつているはずの屋上に、水がきらきら光りながら波立っていた。透明な水が豊かに拡がっていた。

— ウミ！ ママ、ウミだよ。わあ、すごいなあ！ おおきいなあ！

娘は裸足のまま、水のなかに跳びこんで行った。一人で笑い声を響かせながら、水を蹴散らし、両手で水をすくいあげたり、顔に水をつけてみたりしはじめた。娘の足だと、水はくるぶしまで呑みこんでしまっていた。

私と二人の男は水の流れを辿りながら、給水塔の前に行った。水が、そこから、勢いよく溢れ出していた。見とれてしまうほどの、水量だった。

— ここから、あつちの方へ流れて、排水口で間に合わない分が、下に洩れていたんですな。どこかに、小さな罅でも出来ているんでしょう。それにしても……これは大した眺めだ。

三階の男も、⁽¹⁾ 気を呑まれてしまったのか、すっかり穏やかな表情に戻っていた。

— まったく、これじゃ、あの程度で下が助かったのを、ありがたく思わなければなりませんなあ。

— ほら、お子さんをすっかり喜ばせてしまった。

— うちの孫も、水が大好きですよ。

二人の男は眼を細めて、水と戯れている娘の姿に見入った。

— しかし、あなた、真下において、音ぐらいい聞こえていたでしょうに。

不動産屋に言われ、私ははじめて、ゆうべの水の音を思い出した。あの柔らかな、遠い音。この現実の身にもう一度、蘇える音だったのか、と私は不意を襲われたような心地がして、肌寒くなった。

— そういえば、聞こえていたんですけど……起きてみたら、空が晴れ上がっていたものですから……そのまま、なんとなく……。

— なんだ、その時にちゃんと調べていてくれれば、修理もすぐしてもらえたのに。

三階の男が言った。私はしどろもどろに頭を下げて、あやまった。

翌朝早く、給水塔は修理させるから、ということと、二人の男は引き払って行った。その夜、私も裸足になって、娘とたつぷり屋上の海を楽しんだ。何も危険はないはずなのに、水の拡がりに身を置くことには不安がつきまとい、その不安が心を弾ませた。水を掛け合ったり、鬼ごっこをしているうちに、私も娘をびしょ濡れになってしまった。濡れると、さすがに、寒さを感じた。日中、いくら暖かくなつたとは言え、まだ五月のはじめだった。

部屋に戻ると、それまでずっと鳴り続けていたのだろうか、電話がちょうど鳴り終わつたところだった。藤野の顔が思い浮かんだ。その顔に重なり、藤野と暮らせるようになった時の自分の喜び、そして、大喜びで婚姻の届けを区役所に出しに行った自分、藤野との子どもを

ためらいなく産んだ自分に、私はこれからもずっと責任を取らなければならないのでしょうか、と小林(正)に問いかける自分の声が聞こえた。小林は頷うなずいているように思えた。同時に、数えきれないほどの人影がまわりに現れ、さかんに頷うなずきはじめた。

娘の父親であり、私の夫である男だが、私はすでに一カ月以上、その男を知らない、知らせようもない、とりたてて大きな事件は起こらなかったが、その平穏なことに、かえって、これからの日々への恐れを膨おそらませずにはいられないような生活を続けてしまっている。安定を保てるはずがないのに、一向に倒れず、それどころか、そのまま根を張り、新しい芽ゆえさえ覗のぞかせようとする、歪ゆがんだ、こわれやすい、透明なひとつのかたまりを眼の前Bにしているような心地だった。それが見えるのは、私の二つの眼だけなのだ。藤野と再び、夫婦として、なにげなく顔を合わせるには、私Bはあまりにも、この新しく自分に手渡された不安定なかたまりに愛着あいじやくを持ちはじめた。夫として私に立ち向かう藤野の口調は、私に、最早、異和(正)感しか与えなかった。その遠い、意味もよく分からなくなってしまう声に、それでも私は、藤野の方から切り捨ててくれない限り、耳を傾け続けなければならないのだろうか。

別居を決めたのは藤野の方だったのに、それでも私は藤野を忘れてはいけなのですか。私はもう一度、まわりの人影を眺めた。それぞれ私Bが知っている人に似ているような人影は、一様に深々と頷うなずいた。

その夜も、水の音は私の耳もとに響ひびいていた。私は柔らかなく湿った感触に包まれて眠った。翌朝、呆気あつけなく、給水塔の修理は終わってしまった。屋上はみるみるうちに、透明な水を失ってしまった。娘Cが私の代わりに、修理工なぐを詰つめてくれた。

— おみずを、とめちゃだめ。けちんぼ！ だいきらい！

二日後の日曜日には、一日がかりで、屋上Bが補修された。夕方、作業が終わったというので、屋上を覗のぞきに行った。完全に乾くまで、立ち入らないように、と注意されていたので、その注意を娘に何度も言い聞かせながら、屋上への階段を登った。

ドアを開けて、先に屋上を見た娘が、海Bを見つけたときよりも更に高い金切り声を上げて、騒さわぎはじめた。

なにごとよ、と呟つぶやきながら、私も屋上を覗のぞいた。そして、自分(正)の眼を疑うたがった。鮮やかな銀色に一面、照り輝かがんでいた。眩まばゆさに、眼の奥が痛んだ。罅ひのいつた部分を埋める程度の補修かと思っていたのに、防水用のペンキを屋上の隅から隅までたっぷり塗ぬっていったのだ。春ですらこの眩まばゆさでは、夏になれば、覗のぞき見ることもできなくなってしまうのに違ちがいない。この街なかで、眼を焼やいてしまう、雪原を歩く人のように、海を漂たう人のように。

銀色の海。

私は笑わいださずにはいられなかった。これもまた、素晴らしい眺めではないか。しかも、今度は誰だれにもこの海を持ち去ることはできない。きれいだね、おほしさまみたいだね、と娘は銀色の屋上に見とれていた。

藤野から電話が掛かかってきたのは、その次の日の夜だった。私には、ますます藤野の気持ちをごじらせるような対応しかできなかった。

藤野の声を聞きたびにどうして足か震えるのか、分からなかった。

同じ夜、私は自分が銀色の星の形をした器のなかに坐すわっている夢を見た。器は少しずつ回転を速め、気がつくくと遠心力で、私の体は平たくなり、壁に貼り付はいていた。許ゆるして下さい、と叫ぶと、中学生の頃ころの同級生が私の星を見上げて言った。

「あなたは、どうして、そう、だめなの」

同級生と言つても、親しく口をきいたこともない、ずば抜けた成績の持ち主だった。いつも級長に選ばれていたのはともかく、容姿も整っていたので、男友だちも多かった。それにしても、あの人を今頃、夢に見るとはそのこと自体、馬鹿ばかげている、と思いつながら、そんなことを言われたつて、だめなものだめなんだもの、と涙を流しながら弁解をしていた。それに、これでも見捨てずにいてくれる人だつているわ。本当よ。きつと、いるわ。

⑤ 悲しげに首を横に振り、立ち去つて行つた同級生は、昔のままの美しい少女だった。

(注) 1 小林―「私」の勤務先の上司。結婚のいきさつを知っている。

2 異和感―違和感のこと。作者の表記に従っている。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

12
14

(ア) 声を洩はらした

- ① ひとりごとを言った
② こっそりとつぶやいた
③ 悲鳴を上げた
④ 感情的に言った
⑤ 小さく叫んだ

(イ) 気を吞のまれて

- ① 圧倒されて
② 驚きあきれて
③ 無我夢中で
④ 引き込まれて
⑤ 不審に思つて

(ウ) 自分の眼を疑った

14

- ① 不思議に思った
② 信じられなかった
③ 不安を感じた
④ 見とれた
⑤ 意外に思った

問2

傍線部A「この現実の身にもう一度、蘇える音だったのか、と私は不意を襲われたような心地がして、肌寒くなった」とあるが、なぜ「私」は「肌寒くなった」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15

- ① 水の音がするのに放置していたことで、場合によると大きな事故になりかねないと不安になったから。
② 水漏れに対する判断を間違ったことから、自分の責任が問われるのではないかと気がかりになったから。
③ 現実と非現実を混同してしまうような自分は、精神的に不安定ではないかと心配になったから。
④ 夢うつつで安らぎを感じていたものが、実際には危機をもたらす可能性があったのだと恐ろしくなったから。
⑤ 世の中ではいつ何がおこるか分からないという体験をして、人間の生活の不気味さを知ったから。

問3

傍線部B「私はあまりにも、この新しく自分に手渡された不安定なかたまりに愛着を持ちはじめていた」とあるが、なぜ、「手渡された」・「かたまり」という表現が用いられているのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 自分から望んだ状況ではないものの、「私」が娘を育てる責任を受け止めようと決意していることを表すため。
② 別居という事態が自分の意志とは関係なく機械的に進化したことに、「私」がこだわっていることを表すため。
③ 娘との二人暮らしという意にそわない生活を余儀なくされて、「私」がとまどっていることを表すため。
④ 夫との別居によってもたらされた状況が、「私」に重くのしかかってくることを表すため。
⑤ 先が見えない二人だけの生活を強いられたが、「私」がそこに充実感も覚えていることを表すため。

問4

傍線部C「娘が私の代わりに、修理工を詰つてくれた」とあるが、この表現からうかがわれる「私」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17

- 問5 波線部②～⑤における「私」の想像や夢の中に現れる「人影」や「同級生」の様子を、「私」はどのように受け止めていると考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 18。
- ① 二人だけの生活に慣れはじめ、娘が自分の気持ちを察してくれるようになった。水が与えてくれる安息を大切にしたいという自分の思いを代弁してくれたことに対して、うれしく思っている。
 - ② 大人である自分は子供のために「海」を残したいと思っているが、口に出して言えない。しかし、無邪気な子供は好きなことが言えるものだと痛快に思っている。
 - ③ 娘との生活は不安の中に心を弾ませるものがあつた。屋上での水遊びはその象徴のようであり、娘がそれを直感的に受け止める自分の気持ちをうまく言ってくれたと思っている。
 - ④ 娘との二人きりの生活を守っていききたいのだが、周りからの干渉を防ぎきれずにいる。水漏れの件もその一例なのだが、娘がそれに一人で立ち向かってくれたので、いじらしく思っている。
 - ⑤ 遠慮を知らない娘の乱暴な言葉づかいに困惑した。しかし、その乱暴さがかえって、自分の水への愛着の率直な表明になっていることに気づき、うれしく思っている。

- 問6 この文章における「水」についての説明として**適当でないもの**を、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。 解答番号は 19・20。
- ① 周囲の人々は私の苦境を理解してくれていて、それが心のささえになっている。同級生の言動は、他人に頼りがちな私のあり方が肯定できるものではないことを客観的な態度で教えてくれている。
 - ② 周囲の人々は藤野への慎重な対応を促すが、率直には従いがたい。同級生の言動には、当面の問題から逃避しがちで事態を打開できない私の態度に落胆し、昔と変わらないと非難する気持ちが現れている。
 - ③ 周囲の人々は愛情に責任を持っていい、また藤野の気持ちも考えろという。私はそれに従うべきかどうかと悩んでいるが、同級生の言動は、不安定なままで決断できない私を愚かだと決めつけている。
 - ④ 周囲の人々は結婚生活に傷ついた私に今後のことを心配して忠告してくれる。同級生は親しくなかったが、他人に甘えるような私の態度では事態は解決しないと親身になって叱しかつてくれている。
 - ⑤ 周囲の人々は藤野のいうことを聞くようにと迫ってくるが、私はどうしても恐ろしさが先に立ってうまく対応できない。同級生はそんな私の意志の弱さをひややかに批判している。

- 問6 この文章における「水」についての説明として**適当でないもの**を、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。 解答番号は 19・20。
- ① 水は「私」を危険に陥れることがあると同時に、無邪気にさせたり心を弾ませたりする二面性を持っている。

- ② 水は「私」に現実的な不安と心の安らぎを与えており、それは「私」の心の振幅の大きさを示している。
- ③ 水はひとときのあいだけ「海」を出現させることによって、「私」に現実のはかなさを思い起こさせる。
- ④ 水が豊かに拡がる様は、日々の生活で気が晴れない思いをすることもある「私」の心を明るく解放する。
- ⑤ 水の透明性は心を洗うような働きをすることにも、「私」の不安な現状を暗示している。
- ⑥ 水の印象が「私」の心に鮮やかに残り、ペンキが塗られた屋上まで「海」と感じさせるようになっていく。
- ⑦ 罅にしみこむ水の存在は、藤野夫妻のあいだに心の亀裂が生じていたことを比喩的に表現している。

第3問

次の文章は、鎌倉時代後期の歌人二条為世の歌論書『和歌庭訓』の一節である。歌道家の一つ御子左家は、藤原俊成・定家・為家と続いたが、為家の子の代になって相続争いが起こり、直系の二条家と、傍系の京極家・冷泉家とに分裂していた。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。(配点 50)

〈心は新しきをもとむべき事〉

このことは古人の教ふるところ、さらに師の仰せにたがはず。ただし、新しき心いかにも出で来がたし。世々の撰集、世々の歌仙、詠み残せる風情あるべからず。されども、人の面のごとくに、目は二つ横さまに、鼻は一つ縦さまなり。昔より変はることなけれども、しかもまた同じ顔にあらず。されば、歌もかくのごとし。花を白雲にまがへ、木の葉を時雨にあやまつことは、もとより顔のごとく変はらねども、さすがおのれおのれとある所あれば、作者の得分となるなり。

新しきをもとむとて、さまざま卑しげなることどもをもとめ詠むこと、あるべからず。近頃、誰とは覚え侍らず、百首歌を人に見せられ侍りしに、擣衣の歌に、

うつ音のしばしとだえて聞こえぬは今や衣を巻きかへすほど

といふ歌の侍りしを、ある人の仰せられ侍りしは「擣衣の歌は、うぐひすの声、琴の音にもまさりて、やさしく聞き所など侍るに、いりたちて案内者げに侍るこそ見苦しく侍れ」。大方は、古人もかかることは知らぬにて侍らじかし。しかれども、見苦しきことなどは捨てて詠み侍らぬを、めづらしきことの残りたるも、もとめ出だし詠まれ侍るは、口伝無きが致すところにこそ侍ため。このほかの歌どももよろしからぬのみぞ侍りし。心あらん人はたづね見て心得られ

べきか。

また、続千載集のとき召され侍りし御百首の中に、「草刈り入るる野田の苗代」とやらん詠まれ侍りし歌を、ある人の仰せられしは、「これ無下に俗に近く侍るものかな」とぞ侍りし。げにも田舎にて「いかなることぞ」と尋ね侍りしかば、「田作るとて肥とかやもち入るるとぞ申し侍りし。もしさもあらばきたなくや侍らん。いかに家の庭訓をも受け、師の口伝をも聞きたらん人は、いかにもかかることはよも侍らじ。作者誰とも知り侍らねば、もしすぢなきこともや侍らん。

大方は世の中皆ばけけしくなりて、かぎりたる偽りにふけりて、まことに迷ふことのみ待ることのみに待らねども、心憂く侍れ。あるいは、遠国などにて我が身をたてんとて、重代の家督をそしり、あるいは、「家の秘説は我こそ習ひ伝えて」と申す人も侍り。あるいは、門弟などに信ぜられんとて、よんどころなきことを申し出だし、あるいは、「宗匠などは弱くかひなき歌詠みにて、少しも風情こもり力ある歌は、人の歌をも見知らず、我が身も詠まれず」と申し置きて、信仰する人、数を知らず。

これまめやかに深く惑へるなるべし。そのゆゑは、代々伝はりたる家領等ことごとく譲り与へ、たびたび朝家に採用せられて勅撰を承る家督には秘して教へぬことを、庶子に授けんことしかるべしや。家領は偽るところのなきままに、我こそ相伝と称する人も見え侍らず。道は上に見えぬあひだ、無窮の偽りに及ぶ。しかれども、明察の御代に皆あらはれぬるにこそ。また、歌の弱きとはいかに心得べきにか。心深く詞よろしく姿美しく侍るを、強き歌よろしき歌とは申すべし。万葉集の耳遠きことば、凡俗の心を詠めるこそ、弱き歌とは思ひ侍れ、ただし、卑劣の風情は古人詠じもらしたればもとめよく、幽玄の姿は及ばぬままに詠まれ侍らねば、化け物を信仰せるにこそ。

(注) 1 百首歌 — 題を設定して一人で百首詠む歌。四季・

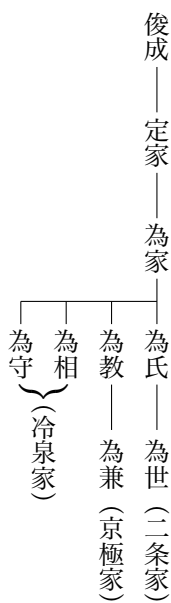
恋・雑にわたる題を用いることが多い。この歌の作者は為守。

2 擣衣 — 衣服の布地を柔らかくしたりつやを出したりするために板の上で叩くこと。

3 続千載集のとき召され侍りし御百首 — 第十五代の勅撰和歌集『続千載和歌集』(一三一九年成立、撰者は為世)の編纂資料とするため詠まれた百首歌。この歌の作者は為相。

4 家督 — 家の当主。為世のこと。
5 宗匠 — 歌道の指導者。為世のこと。

〔御子左家系図〕



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

23

21

(ア)

作者の得点

21

- ① 作者に入る謝礼
- ② 作者のかちえた名声
- ③ 作者が獲得した権利
- ④ 作者の表現の独自性
- ⑤ 作者が見いだした素材

(イ)

いりたちて案内者げに

22

- ① 擣衣の音が聞こえる場所を教える人のよう
- ② 擣衣をしている現場に読者を導く人のよう
- ③ 歌を作る場に身を置いて解説する人のよう
- ④ 歌の作り方には詳しいと自慢する人のよう
- ⑤ 擣衣のやり方を細かく知っている人のよう

(ウ)

よんどころなきこと

23

- ① 根拠のないこと
- ② やむを得ないこと
- ③ 頼みがいがないこと
- ④ 苦しませぬこと
- ⑤ 思いも寄らないこと

問2

波線部④、⑤の空白部分にはすべて補助動詞「侍り」が入る。正しい活用形を次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

24

26

④ 心あらん人はたづね見て心得られ 24 べきか。

⑤ 「家の秘説は我こそ習ひ伝へて 25」

⑥ 明察の御代に皆あらはれ 26 ぬるにこそ。

- ① 未然形「侍ら」
- ② 連用形「侍り」
- ③ 終止形「侍り」
- ④ 連体形「侍る」
- ⑤ 已然形「侍れ」
- ⑥ 命令形「侍れ」

問3

傍線部A「作者誰とも知り侍らねば、もしすぢなきこともや侍らん」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 歌の作者は名もない人なので、おそらく姿の整っていない歌を詠んだりするのでしよう。
- ② 歌の作者とは面識がありませんので、仮に行き違いがあったとしても仕方がないでしょう。
- ③ 歌の作者がだれかわからないとぼけたせいで、もしかしていきかいが生じたのかもしれない。
- ④ 歌の作者のことを知らずに言ったことなので、もしや気を悪くさせたのではないかと恐れます。
- ⑤ 歌の作者がだれなのか知りませんので、ひよつとすると見当外れな意見かもしれない。

問4

傍線部B「宗匠などは弱くかひなき歌詠みにて、少しも風情こもり力ある歌は、人の歌をも見知らず、我が身も詠まれず」の内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 宗匠になっても力が不足していると、的確に他人の歌を評価したり自分で詠んだりできない。
- ② 宗匠は気弱な性格のため、人の歌についても自分の歌についても的確に評価することができない。
- ③ 宗匠などについて歌を習っても力強い歌は作れないので、他人の歌をよく詠み、自分で作ってみるのが大事だ。
- ④ 宗匠は、すぐれた歌を見分ける能力もなく、自分で作る能力もない、まことに頼りない歌人である。
- ⑤ 宗匠を含めた今の時代の歌人のなかには、力強くかつ風情のある歌を詠む才のある歌人はいない。

問5

傍線部C「幽玄の姿は及ばぬままに詠まれ侍らねば、化け物を信仰せるにこそ」の、本文全体の内容と関連させた解釈として、適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 29・30。

- ① 幽玄の姿は和歌の理想であつて、そう簡単には実現できない。それを正確に理解することも難しいので、化け物を理想として信仰するようなあやまりに陥らないようにしなければならない。

- ② 幽玄の姿がなかなか実現されず、世の中の風潮が表面的な華やかさを尊ぶ傾向にあるので、今こそ正しい歌詠みの伝統に立脚した和歌の世界を実現すべきである。
- ③ 幽玄の姿は和歌の理想であるが、多くの場合、それに到達できない歌が詠まれている。その結果、偽りの教えを規範にするようなあやまりを生じている。
- ④ 幽玄の姿は和歌の理想とされてはいるが、その本質は卑俗な題材を好んで取り上げるようなあやまりを含んでおり、それはあたかも化け物への信仰に似ている。
- ⑤ 幽玄の姿は極めて微妙なものであり、かえってそれに到達しないままに詠まれるのがよく、無理にそれを実現しようとすれば、化け物を信仰するのと同様のあやまりに陥ることになる。
- ⑥ 幽玄の姿を理想とする和歌の相伝は、土地の相続などとは違い、目に見えないものであるので、偽りの理想を追うと化け物への信仰に似たあやまりに陥る危険がある。

問 6

筆者の主張する和歌の読み方についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 人間の顔が、目や鼻の数は同じでもその形や配置は一人一人微妙に異なっているように、和歌も微妙な差異を強調して詠むべきである。
- ② 花を白雲に、木の葉を時雨にたとえて表現するのは、尊重すべき伝統的な読み方であるが、卑俗な題材に陥らないようにしつつ、新しい比喩表現を考えるべきである。
- ③ 「擣衣」という題で詠む場合、衣を打つ音は優美なので題材としてふさわしいが、具体的な動作を読み込むのは卑俗になるので避けるべきである。
- ④ 農村風景を詠む場合、農業に従事している人に実状を確かめた上で、卑俗なことがらを排除し、それ以外の題材で詠むべきである。
- ⑤ 伝統的な表現方法や題材を守るとはいつても『万葉集』に収められている和歌を手本にすることは、和歌を俗っぽいものにしてしまうのでやめるべきである。

問 7

平安・鎌倉時代の歌人についての説明として正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

- ① 藤原俊成は「ますらをぶり」の和歌を尊重し、歌論書『近代秀歌』を著した。
- ② 藤原定家は第八代の勅撰和歌集『新古今和歌集』の撰者であり、その歌論に『毎月抄』がある。
- ③ 後鳥羽上皇は『新古今和歌集』の編纂を命じ、自らも歌謡集『梁塵秘抄』を編んだ。

- ④ 西行は『新古今和歌集』に最も多くの歌が載る歌人であり、家集に『発心集』がある。
 ⑤ 鴨長明は無常観を基調とした随筆『方丈記』ならびに歌論書『無名草子』を著した。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

唐臨為大理卿、初莅職、断一死囚。先时坐死者十余人、皆他官所断。会太宗幸寺、親録囚徒。他官所断死囚、称冤不已。臨所断者、默而無言。太宗怪之、問其故。囚对曰、「唐卿断臣、必無枉濫。所以絶意。」太宗歎息、久之曰、「為獄固当若是。」囚遂见原。即日、拜御史大夫。太宗親為之考詞、曰、「形若死灰、心如鉄石。」初、臨為殿中侍御史、正班。大夫韋挺責以朝列不肃。臨曰、「此將為小事、不以介意。請俟後命。」翌日、挺離班与江夏王道宗語。趨進曰、「王乱班。」将彈之。道宗曰、「共公卿大夫語。」臨曰、「大夫亦乱班。」挺失色而退。同列莫不悚動。

(劉肅『大唐新語』による)

(注) 1 大理卿—大理寺(司法を担当する役所)の長官。

2 太宗—唐の第二代の皇帝。

3 録—裁判に間違いがないか、再点検すること。

4 冤—無実の罪。

5 枉濫—法をまげて罪におとしいれること。

6 御史大夫—御史台(役人の不正取り締まり・式典の進行などを担当する役所)の長官。

7 考詞—役人の業績や人格を評した言葉。

8 殿中侍御史—御史大夫に従属する官。

9 班—儀式における席次。

10 大夫—御史大夫を指す。

11 朝列不肅—朝廷での儀式の列が整っていないこと。

12 江夏王道宗—唐の王族のひとり。

13 悚動—恐れて震えあがること。

問1

傍線部A「所_レ以_レ絶_レ意。」とあるが、具体的にはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33。

- ① それ私が太宗に会うのを断念した理由です。
- ② それ私が釈放の望みを持った理由です。
- ③ それ私が絶望して無実の罪に服した理由です。
- ④ それ私が唐臨の裁判を拒否する理由です。
- ⑤ それ私が判決をすなおに受け入れた理由です。

問2

傍線部B「為_レ獄固当_レ若是」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 為_レ獄固当_レ若是 獄の固_{もと}より当_あたるが_{ため}に_は是_かくの若_{ごと}しと
- ② 為_レ獄固当_レ若是 獄の固_{もと}より当_あに_は是_かくの若_{ごと}くなるべきが_{ため}なりと
- ③ 為_レ獄固当_レ若是 獄の固_{もと}より_は是_かくの若_{ごと}く_も当_あたるを_為むと

- ④ 為^レ獄固当^レ若^レ是 獄を為^まむること固^まより当^まに是^まくの若^まくなるべしと
- ⑤ 為^レ獄固当^レ若^レ是 獄を為^まめて固^あより当^あたること是^まくの若^ましと
- ⑥ 為^レ獄固当^レ若^レ是 獄の為^ために固^まより当^まに是^まくの若^まくすべしと

問 3

傍線部 C 「心如^二鉄石^一」は、唐臨のどのような態度を表現したのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

35

- ① 死刑の判決を受けた者でさえ納得するほど厳密に裁判を行う公正な態度。
- ② 囚人が無実を訴えても、それに惑わされずに正しく裁判を行う冷静な態度。
- ③ 自分が一度くだした判決は皇帝の命令があつても変えようとしない厳格な態度。
- ④ 囚人に無実の可能性があれば、判決を再審査しようとする厳正な態度。
- ⑤ 無実の可能性があつても、他の役人がくだした判決には関与しない堅固な態度。

問 4

傍線部 D 「趨進曰^レ・E「將^レ彈^レ之」の主語として最も適当な組合せを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

36

- ① D 唐臨 E 唐臨
- ② D 唐臨 E 道宗
- ③ D 唐臨 E 韋挺
- ④ D 韋挺 E 唐臨
- ⑤ D 韋挺 E 道宗
- ⑥ D 韋挺 E 韋挺

問 5

傍線部 F 「挺失^レ色而退^レ」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

37

- ① 王族である道宗に遠慮してその過失を指摘することができず、御史大夫としての立場を失ったから。
- ② 厳粛な儀式で席を離れて私語をするという過失を道宗に指摘され、上司としての面目を失ったから。
- ③ 儀式の場における道宗と自分の過失を部下の唐臨に指摘され、御史大夫としての立場を失ったから。
- ④ 儀式が厳粛でないことを、道宗だけでなく部下の唐臨にまで指摘され、上司としての面目を失ったから。
- ⑤ 儀式の場で道宗から話しかけられてそれに応じたことを上司に指摘され、御史大夫としての立場を失ったから。

問 6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

38

。

- ① 唐臨は、大理卿のとき裁判が公平無私だったので太宗の考詞をたまわり、殿中侍御史に任命された。
- ② 唐臨は、冤罪だと訴える死刑囚を太宗が許そうとしたのに対して、自分のくだした判決は正しいと主張した。
- ③ 唐臨は殿中侍御史のとき上司に対しても自分の信念を強く主張したので、彼の身を案じない者はなかった。
- ④ 唐臨は殿中侍御史になってからも自らの意志を貫いたため、世間では彼のことを鉄石のごとき人物と称賛した。
- ⑤ 唐臨は殿中侍御史のとき韋挺の過ちを指摘し、大理卿になってからも公正な裁判を行い、御史大夫に昇進した。